

今月号の エッセイ 人類にとっての「ネット時代」を考える

トピックス

本号では、ネット問題を「人類史の視点で考える」必要性を強調し、脳科学に関心の高い吉田雅人さまに、エッセイ風に執筆していただきました。

「ネット時代」の到来で、人類は人類史上の大きな曲がり角に来ていると思います。そんな問題意識から、ゴリラ学の国際的権威で元京都大学学長・山極寿一氏の著作や、ベストセラー『スマホ脳』の内容に触れてみたいと思います。

ミラーニューロンと「共感能力」

今から30年ほど前、「ミラーニューロン」が発見されました。この「発見」は、私が不思議に思っていた幼児の行動を解明する手掛かりになりました。3歳児が玩具で遊んでいると、それをじっと見ていた別の3歳児が、遊んでいる子の玩具を取ろうとして、よく喧嘩がおきました。先生が、同じ玩具を目の前に持っていてもダメ。遊んでいる子の玩具でなければダメなのです。遊びを見つめていると、遊んでいる子と同じ脳の部位が活動するのです。だから、その子の玩具を欲しいのです。この「喧嘩」は、ミラーニューロンが働き、他者への共感によって起きるのだと気づいたのです。

ベストセラーの『スマホ脳』でも、「ミラーニューロン」に触れた重要な指摘があります。著者のハンセン氏は「心の理論の能力は、他人の表情や行動、仕草を繰り返し観察することで得られる」とした上で、「1万4000人に及ぶ大学生を調査したところ、80年代から共感力が下がっていた。特に2種類の能力が悪化している。共感的配慮という、辛い状況の人に共感できる能力。それに対人関係における感受性だ。これは別の人間の価値観にのっとり、その人の視点で世の中を見る能力だ。同じ傾向が大学生だけでなく、小学校高学年や中学生にも見られた。」とし、「デジタルライフが共感力を鈍らせ、心の理論能力を弱めていると100%断言することはできない。だが、まさにそうだと示す兆候がいくつもあり、心配になる。」としてい

ます。

この点では、山極寿一氏も「人間以外にも、ゴリラやサルにも共感能力は見られますが、人間ほどではありません」とし、人間の子ども達が、憧れの対象を見つけ出し、他者に自分を重ね合わせて未来を創造する能力も、共感能力の発達によるとしています。また逆に、大人が子どもに教えてやりたくなる心理も他の霊長類には弱くて「人間に特殊な情緒」だといいます。「共感能力」は、人間を人間として特徴づける、とても大切なものと言えるようです。(引用は『「サル化」する人間社会』より)

ネット時代の「五感」と「思考・言語」

言葉を持たないゴリラと生活してきた山極氏は、人類が獲得した「言葉」の持つ「負」の側面についても言及します。

言葉を持たなかった時代には言語的な思考ではなく「直観」で判断しました。アフリカで突然ヘビに出会ったら、その現実を「五感」で察知し、直感で判断するしかなかったのです。

ところが、言葉を獲得したことで、人類は「五感」を記憶に留める必要がなくなりました。見たことや感じたことを言葉に置き換えておけば、言葉によって思い出せるからです。

山極氏は、言葉を「五感」の「外付け記憶媒体」とも表現しています。そこに、PCやAIが入ってきたのが現代です。人間はテクノロジーを発達させることで、その「外付け記憶媒体」を急速に大容量化しているわけです。こうなると、言葉で記憶する必要さえ減ってきます。さらに、AIが自分の好みまで解析して教えてくれるのですから、自分で考える代わりに「クリック」すれば良い、という傾向が強まることでしょう。

「化石燃料」が産業革命をもたらし、人類が生活の「便利さ」に甘んじた結果、気候変動という未曾有の事態を招いてしまったことから学ぶべきでしょう。「ネット時代」の持つ「負」の側面の大きさに警鐘を鳴らさないといけないのだと思います。